

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：84419

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720043

研究課題名（和文） 南都系仏教絵画における図像の解析と再構成に関する研究

研究課題名（英文） A study on the analysis and reconstitution about the Iconography
On *Nanto Butsuga*, Buddhist paintings painted in mediaeval *Nara* town

研究代表者

古川 攝一（FURUKAWA SHOICHI）
（財）大和文華館

研究者番号：70463297

研究成果の概要（和文）：

中世南都をめぐる仏画制作において、図像が果たした役割や意味について、現存作例から考察を加えた。平安時代後半に集積された白描図像が、経典の規範に縛られない、学侶や発願者の個人的な思想を反映した仏画制作の原動力となった点を明らかにした。図像の変容と再構成については東アジア絵画史にも視野を広げ、元時代に描かれたマニ教絵画の分析を行った。仏教とマニ教という異なる思想を描いた絵画でも、図像や表現に多くの類似点があることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In the course three years, I surveyed Buddhist paintings produced in Nara during the medieval period, while paying special attention to the roles and meanings of iconographies for their production. In late *Heian*-period Buddhist iconographic pictures painted in a monochrome outline drawing (*Hakubyo-zuzo*) were edited and gathered by esoteric masters. These drawings came to be reconstituted for producing totally new paintings expressing the masters and clients' own thoughts sometimes in contradiction to traditional rules and prescriptions. Considering broader Asian context, I also compared Buddhist paintings produced in the area around Ningbo with the contemporary Manichaeian paintings produced in China and discovered many similarities in styles and motifs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1400 千円	420 千円	1820 千円
2010 年度	1300 千円	390 千円	1690 千円
2011 年度	1200 千円	360 千円	1560 千円
年度			
年度			
総計	3900 千円	1170 千円	5070 千円

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史、仏教絵画、南都、南都絵師、宮曼荼羅、図像、寧波、マニ教

1. 研究開始当初の背景

中世南都寺院における絵画制作については、戦前から研究が進められており、絵仏師に関する問題が考察の対象となってきた。森末義彰氏による、主に興福寺の造像活動に従事した南都絵所について先鞭をつけた研究がまず挙げられる。戦後これを受け継いだのが平田寛氏であり、同氏が著した『絵仏師の時代』（中央公論美術出版、1994年）において集大成された。同氏の詳細な史料提示と分析により、南都において活躍した絵仏師たちの活動の実態や系譜についての研究が飛躍的に進められた。東大寺に属したと見られる絵仏師についての考察がなされた点は特筆される。

一方で現存作例の分析により、南都仏画特有の画風や図像についての研究も進められてきた。有賀祥隆氏は、南都仏画と規定できる作例を挙げ、平安時代の京都で制作された所謂、平安仏画と作風を比較する形でその特徴を論じた。漠然としていた「南都仏画」を定義した点は高く評価される。また林温氏による一連の論考により、描かれた図像の尚古性、地域性、時代性を考慮した新たな視点も提示された。

国文学の分野では近年、南都寺院における唱導や説話研究がめざましい。牧野淳司氏や近本謙介氏等、文学や文献史料から治承兵火後の南都復興をめぐる唱導や歴史認識を読み取る研究が行われ、永村眞「中世寺院における相承」（『中世文学』48、2003年）では、興福寺で行われた法会を通して、仏法や聖教がどのように伝えられたのかが解き明かされた。東大寺に関しては、東大寺文書の分析から、中世東大寺における寺院組織や経済基盤、学侶についての研究が積み上げられてきた。最近では、鎌倉復興期に東大寺別当を務めた弁曉の唱導史料が公開されたこともあり、復興期に行われた法会の様相が明らかになることが期待される。

このように文学や日本史学の分野では、中世南都寺院をめぐる組織、法会、思想などの研究が総合的に進められている。一方、美術史学においては既述のように、個々の作例についての考察はなされているものの、それらを一つ一つ関連させ、総合的に検討することは未だなされていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究は、既述の先行研究に学びつつ、中世南都の仏画制作において図像がどのような意味を有し、それが如何なる理由で選択されたのかを、以下の点に留意しつつ多角的に検証する。

(1) 中世初期に制作された仏教絵画について、図像の選択と再構成をキーワードに捉え

直す点。

従来、特定の由緒に基づいた異なる図像を再構成して制作された作例は知られていたが、個々の作例の検討で完結していた。本研究はそれらを一つ一つ関連づけ、南都という文化圏の中での位置付けを試みる。

(2) 特定の儀軌類の規定に基づかない、個人あるいは同一の信仰や思想を共有するグループと結びついた仏画の系譜を構築する点。

既往の仏画研究では、如何なる儀軌類に基づき（主題）、どのように表現され（制作年代）、どのような儀礼に用いられたのか（制作背景）を考究することに主眼が置かれ、成果を上げてきたと言える。一方、複数の図像を組み合わせて構成されるなどしてこれに当てはまらない仏画は特殊な例と見なされ、制作年代や漠然とした背景を指摘するに留まっている。本研究はこれらの諸作例に光を当て、新たな仏教絵画史の構築を目指す。

(3) 隣接する諸学問の成果を積極的に取り入れ、多角的に検証する点。

日本史及び仏教史の分野では既に、治承の兵火を契機とした教学復興の様相を解き明かした研究や、学僧の思想を解明する鍵となる史料の公刊などが行われた。これに対し美術史の分野では、現存遺例に限られていることもあって議論が滞っている。周辺諸学問の成果を援用しながら、新たな視点により、こうした状況を打破することを試みる。

本研究によって、これまで体系的に議論されることがなかった、図像を集合させて再構築した中世仏教絵画について、そこに共通する図像のメカニズムや思想を解明することを試みる。このことは、仏画だけでなく、掛幅の説話画や絵巻、建築、尊像の堂内配置等、中世の信仰の場でしばしば見られる、図像の復古や改変のメカニズムの解明にも繋がるものと考えられる。

以上のように本研究では、中世初期の南都において図像がどのように選択され、再構成されたのかを、周辺諸学問の成果を援用して総合的に分析し、いわゆる「南都仏画」を考察する横断的な視点の提示を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 考察の対象

本研究は、12世紀半ばから13世紀にかけての南都に関わる作例が対象となるが、白描の図像集や南都と直接関わりのない作例であっても、問題の所在などの共通点を見出す可能性があるならば広く調査し、考察を進めた。その過程で、国内に現存することが判明したマニ教絵画について得られた知見は大きい。一連のマニ教絵画は、元時代末頃に描

かれたと推定され、東アジアという枠組みの中で、図像の系譜や変容について考察する重要な機会となった。

(2) 作品調査

作品調査に当たっては、表現様式・表現技法の検討を行うため、可能な限り撮影を行い大量の画像データを収集することを目指す。仏画の表現技法については、有賀祥隆氏や渡邊明義氏によってその技法が平易に説かれ、奈良国立博物館・東京文化財研究所情報調整室編『国宝絹本著色十一面観音像』(中央公論美術出版、2006年)などの公刊により、彩色技法の細部まで図版で確認することが可能となった。こうした成果を活用することである程度、表現技法の特色をつかむことが出来ると考える。

(3) 文献調査

公刊されている日記類や社寺関係文書から、仏画制作に関連する事項、法会などの儀礼と仏画の関係が分かる事項の抽出を行い、未刊行の史料についても写真版などで積極的に収集を行う。社寺関係文書の公刊や聖教類に含まれる唱導史料についての研究は、近年急速に進みつつあり、これらを精査することによって、図像の収集と再構成が如何なる思想的背景のもとで行われたのか、その様相に迫ることが出来ると考える。また、同時代文献史料、特に最近研究が盛んである唱導・説草史料の収集・分析により、仏画の制作背景や、制作指導者の信仰・思想、及び用いられた儀礼など、仏画と学侶との関係、それがどのように図様に反映されたのかの考察を並行して行う。

4. 研究成果

(1) 図像の機能

① 図像の集積と解析

図像の役割は「仏のかたち」を正しく伝えることにある。平安時代後期において、それは由緒ある過去の図像であり、新渡の宋請来図像、あるいは奈良時代の作例を通じて得られる唐の図像であった。院政期頃から、院や貴族の発願によって創建された寺院には、各地の寺院に秘蔵された仏画や経典が集められ、盛んに行われた修法は宗派間における僧侶の交流を活発化した。同時に、より効験のある修法や本尊を求め、僧侶たちとの図像研究が盛んとなったのである。このような状況のもと、様々な図像が「再発見」あるいは「請来」され、平安時代後半から起こった南都仏教の教学復興の気運を盛り上げ、複数の図像を一図に再構成して描く仏画が描かれる原動力となった点が明らかとなった。

② 聖性の流布

彩色された仏画は本来、図像をもとに制作される。下絵としての図像の役割である。あるいは、重要な本尊画像は、その姿を伝える

ために、色註と共に転写された。国宝「善女龍王像」(金剛峯寺蔵)や、円珍感得の黄不動尊の例が挙げられる。とりわけ特異な姿をした黄不動は、三井寺における信仰の格であり、秘仏である。曼殊院に所蔵される作例を始めとして、各地に模本が伝わる。模本の流布には、下絵としての図像が不可欠であり、原本の聖性をより高めたものと思われる。本来は秘すべきもの、彩色された仏画に付属するものであった図像が、その重要性を増し、本画から解放されたといえる。

(2) 図像と仏画

① 尊像表現における形態把握

眼の形や顎の輪郭の取り方といった、図像の「形」から来る影響である。「不空罽索観音二神将像」(大英博物館蔵)と「仏眼仏母像」(高山寺蔵)をはじめとする諸作例に認められる。

② 線描の親近性

玄証本図像と「善財童子歴参図」(東大寺他蔵)に見られる強い親近性に代表される。善財童子歴参図が、彼らのような能筆の画僧が描いた白描図像をもとに制作された、あるいはその制作に直接携わったことが想像される。

(3) 図像の選択と絵師の共有

今回考察の対象とした諸作例は、各々制作背景が異なる。しかし、既述のように制作背景の異なる仏画に共通する表現が認められる点は、図像や絵師の交流が活発であったことを示す。「俱舎曼荼羅図」(東大寺蔵)における、覚樹と珍海のように、当時の絵画制作の一つの形態として、学侶と能筆の僧侶、あるいは絵仏師による協働という点が挙げられる。学侶達の間で活発な交流がある以上、具体的には、寛信、覚樹、弁暁、明恵、貞慶などが挙げられるが、彼らに有縁な諸寺、すなわち、東大寺や勸修寺、高山寺、笠置寺などに、ネットワークがあり、絵師たちも共通していたことが想定される。

(4) 規範を保つ図像—宮曼荼羅—

建築描写や自然景観などの、一定の規範を持つ図像の継承が認められる作例群として、「春日宮曼荼羅」が挙げられる。鎌倉時代以降、盛んに制作され、優品も数多く伝わる。その制作には南都の絵師の関与が想定され、彼らの中で共通する紙形の使用が考えられる。彼らの中で図像の集積が行われ、「柿本宮曼荼羅図」(大和文華館蔵)に代表される周辺の社寺の景観を表現した作例も創出された。

(5) 図像の変容—マニ教絵画—

マニ教の世界観を表したマニ教絵画が、大和文華館に所蔵される「六道図」をはじめ、国内に現存することが判明した。何れも元時代の作例と見なされる。特筆されるのが、同時代に描かれた仏教絵画と図像や表現に強

い親近性が認められる点である。仏教とマニ教、表現される世界観は全く異質なものであるが、一定の共通性が認められることは、描いていた絵師たちの間での図像の共有がなされていたことを示す。また、仏教絵画における図像を典拠としたと見られるモチーフが見られることから、柔軟な図像の改変、変容が行われていたことが推測される。

こうした成果をふまえ、大和文華館にて「開館 50 周年記念特別企画展 I 信仰と絵画」(2011 年 5 月 14 日～6 月 19 日)を開催した。マニ教絵画や関連する元時代の仏画を一同に展示し、併せて国際シンポジウムを開催することにより、広く研究成果の還元を行った。

以上のように、図像の解析と再構成を軸に、日本の中世仏画のみならず、元時代の仏画やマニ教絵画にまで視野を広げて考察を行うことが出来、今後の研究の進展にも繋がる有意義な成果を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

①古川攝一「新出マニ教絵画試論—制作年代をめぐって」『大和文華』査読あり、121 号、2010 年、35—52 頁。

[学会発表] (計 1 件)

①古川攝一「柿本宮曼荼羅 (大和文華館蔵) の制作をめぐって」科学研究費基盤研究 (A) 大画面説話画の総合研究海外シンポジウム「中世日本の信仰と造形」2011 年 3 月 11 日、ハーバード大学。

[図書] (計 2 件)

①『大和文華館の垂迹画』大和文華館、2011 年。

②『開館 50 周年記念特別企画展 I 信仰と絵画 特集図録 マニ教絵画』大和文華館、2011 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古川攝一 (FURUKAWA SHOICHI)
(財) 大和文華館・学芸部・部員
研究者番号：70463297